
神様から来た招待状

空深

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様から来た招待状

【Nコード】

N9913W

【作者名】

空深

【あらすじ】

まず初めに、不定期更新です。次の話もまったく見えておりません。主人公は何処にでもいてそんなモブ男Aです。特に何かをやっていたという経験ありません。世界観はゲームのような異世界です。ゲームの中じゃありません。たぶん。作者は迷宮に早くも入ろうとしています。気がついたら更新していただくのペースかと思われます。それでもよければ、ぜひ一度、気が向けば見ていってやってください。

さあ、逝ってみよう(前書き)

不定期更新です

先が見えていません

さあ、逝ってみよう

何か知らんが、「神様からの招待状」
ポストに入っていた

あて先に家の住所が書いてあつて綾川葵様と、俺の名前あやかわあおいが書いてあつた

誰が送ってきたかはわからない。

突然だが家の家族構成を紹介しようと思う。父親と母親それに弟一人がいる。親二人は結構なイケメンと美人さんというお似合いの夫婦といわれている、勤め先は大手の株式会社だ。弟は出来が良くイケメンで何でもできる都内の有名高校の高校1年生だ。俺はというとこれがまったくの正反対で勉強のできないダメダメでクラスで目立たないモブ男くんAという言い方がぴったりなただの高校3年生だ。俺のような人間がなぜあのような夫婦から生まれてきたのかわからない。俺の家族の説明はこんなものだ。

さて、あの「神様の手紙」
「とかいうふざけた手紙だが、おれにはあんな手紙を送ってくる奴は友達にはいない。出来のいい弟の友達にこんな送ってくる奴はいないだろう、仲のいい親関係は論外だ。」

誰のいたずらかわからないがとにかく読んでみる事にした。

「えゝあなたは記念すべき神様達によるパーティの記念イベントに当選しましたゝドン！ドン！パフパフ！おめでとぅゝ
つきましては詳しいことは後日連絡させていただきます！！！！」

「えーそれと選ばれた理由はですね、日本人で二次元大好きでなおかつ、影と幸の薄そうな奴 The ワースト444から選ばれましたー!!!」

^^ ^^ / / / よかったね!

大きなお世話ジャ――

――!!!

「さらに!あなたは上位に位置してたほどさえてないです! (笑)」

女の人がこちらを向き

「さて、思い出せましたでしょうか？」

「ええ、まあ一応・・・」

「こちらにも他に仕事がありますので早速終わらせてしまいまいましよう」

「・・・簡単に説明しましょう・・・」

まず目に前にいたのが神様の秘書という人です。

場所は俺の夢の中で「神様の招待状」をもらった人を一軒一軒、夢の中で訪れているらしく、それがとうとう俺に回ってきて今現在説明を受けているところだ。

「まず初めに、なぜ日本人が選ばれたかといいますと想像力が豊かだからです。日本では小説やアニメといった色々な娯楽にあふれており、この企画に一番適応していると判断したためです。」

ああ、何か話が見えてきた

「そして神様、つまり、わたしの上司に当たる方々が・・・」
「なんかさ、最近暇だからかわいそうな幸の薄い人間たち集めて色々な特典持たせて異世界召喚しようぜ」ということで異世界へ逝ってきてもらいます。」

なんとなくわかってたよ・・・というか本物だったんだなでも俺そんな面倒な事は「あなたに拒否権はありませんので、招待状の裏に《断る場合はこの紙を破り捨ててください》と書かれていますので、あなたは破っておりませんのであしからず」そんなもん知ら

ないよ

「特典の個数ですが、一の位の数と十の位の数の二つのサイコロを振っていただきます、最高で66個の能力を与えて差し上げます。ではどうぞ」 3、4あたりこい!!!

カランカラン……

「十の位が4で位置に位が6でしたので合計46個の要望を承ります」どうしようかなー？

「それとあなたが逝く世界ですが、世界観は中世ヨーロッパ風で王様がいます。魔法があつて、魔物がいて、ギルドがあつたりとかする世界です。なので、その事を良く考えて要望を決めてください。それでも決まらない場合は、こちらで決めさせていただきます。・・・この世界は神様が日本のゲームを本に作った世界ですので注意してください」

うん……とりあえずあれとあれが欲しいな、あつて困らないものが欲しい

と言うか平凡に暮らしてでも死なないようにしてほしい

は！あれがあるじゃないか！

他のどんな特典よりもすばらしい能力が！

「まず初めに、創造の能力が欲しいです！」

「それだと少し制限させていただきます」

できるのか！

「どのような制限ですか？」まあ、当たり前か、仕方ない

「生き物の創造は出来ず、創造するものを見た事があり、創造するものを的確にイメージしないと使えないようにします。さらに、創造で作れるものの範囲は縦・横・高さが5mまでとします」

それでもとても便利だ

「わかりました。次は、身体能力と魔力量を人間が持つ事のできるぎりぎりまであげてください。それと

向こうで使えるすべての魔法を使えるようにしてください。消費魔力を出来る限りなしにしてください。複数の魔法をまとめていっぺんに使えるようにしてください。魔法の融合・・・と言うか、新しく魔法を作れるようにしてください。俺の運を上げて下さい。後は・・・適当にお願いします」

魔法関係に落ち度は無いはずだ！

「わかりました、後は私が適当に付け加えます。ご家族の方には『旅に行くってくる、心配しないでくれ』

と置手紙を用意しましたので」

「ありがとうございます」

「それではご苦労様でした。逝ってらっしゃいませ」

「あ、最後に質問しても？」

「?・・・何でしょうか?何か手違いでもありましたか?」

「いえいえ!ありません!簡単なただの質問なんですけど・・・」

「何でしょうか?」

「あの手紙送ってきたのは、あなたではないでしょう。いったい誰ですか?」

「神様の孫にあたる方です、パーティーの内容は孫のわがまま誕生日イベントです・・・」

「じゃあ、さっきの余った特典の一つで簡単な罰を与えておいてください」

「わかりました。こちらで与えておきます。今度こそ逝ってらっしゃいませ」

なぜかだんだん眠くなっていき・・・意識を失った・・・

さあ、逝ってみよう(後書き)

さあ・・・次の話はどうしましょうか？・・・

異世界に来た（前書き）

気が向いたら書くようにしています

異世界に来た

サアアアアア

風が優しく頬を撫でる

「ううん」

えっと、俺は確か神様の秘書さんに送り出されてんで・・・

「ここが異世界なのか・・・」

見渡す限り緑が一面と広がりここで寝ればとても気持ちよさそうなところだ

「ああ、着たんだな、異世界に」

まずは、人を見つけないと、そう思い自分の格好を見る
パジャマ姿がゲームで見た事のある初期装備になっていた

《ああー聞こえますか？》

頭の中に神様の秘書さんの声が響く

「ええ、聞こえてますよ」

《良かった、無事成功して良かった。ああ、あなたのその格好はパジャマ姿ではさすがにと思い神様の加護の付いた特注品を用意させてもらいました。そのような格好ですが、あなたのいる世界ではトップレベルの装備となっております腰にある剣も同じようなものです》

「ただの旅人の服と何の変哲も無い剣にしか見えないんですけど」

《大丈夫です、きちんと加護は機能しています。次は、右手をご覧ください》

見方を変えれば七色に輝くきれいな指輪があった

「この指輪だけやけに高そうなんですが・・・」

《それはですね、この世界の大精霊の加護が付いています属性は火・水・土・雷・風・光・闇・無・時空ですね》

「すみません、念の為に、時空の属性の説明を・・・」

《時空の精霊はその名のとおり、時を操る精霊で物の腐敗や食べ物の腐敗を遅くしたり、一定期間無くしたりなどのことが出来る精霊です》

「へえ」

《精霊は精霊魔法を使って操ることができます》

「では、精霊魔法ってどうやってできるんですか？後、人の使う魔法って体内にある魔力をつかうんですよね？」

《その手の説明は後で魔法の説明と一緒に脳に送られる手はずになっっているんですけど・・・まあ、簡単に説明いたしましょう。精霊魔法は人やエルフや獣人などの者と契約して、契約した精霊に魔力を与えそれに似合った分だけ精霊は力を貸してくれます。精霊魔法は特別な詠唱も必要しません。あえて言うならば、契約した者との合性が良いことと、仲の良さでしょう》

《魔法は人の想像イメージによって威力などが向上します。あなたの場合、アニメなどで想像がしやすいと思います。人の体の奥底にある魔力を媒体に魔方陣を構築し、魔法名を叫ぶと、世界を通して魔法が発動します。新しく魔法を作る場合、これもほとんど同じなのですが、どのような魔法にするか想像し、想像した魔法に似合う分を媒体に魔方陣を構築し、それを世界が認めたら新しく魔法ができます。そのあと構築した魔法が放たれればOKです。使えば世界が認められた事になります。どんなに綺麗な（構築が）魔法でもあまりにも理が外れていた場合発動しません。無理に世界に呼びかけ何度も発動させようとした場合、最悪、死に至りますので、死ななくても無事ではいられません。こんなものでしょう、・・・ああ・・・ほとんど全部言ってしまった・・・》

.....

「精霊魔法を使う人はどのくらいの人が使えますか？」

《使う人は200〜300人に一人くらいだったかと・・・それと精霊はとても無邪気で悪意はないのですが人を選びます。精霊は選んだ人に契約を求め、契約し、初めて精霊魔法を使う事が出来るようになるのです。ですので精霊魔法を使う人は大抵信用が出来ます。契約できる精霊の数は、その人の力量しだいです。あなたの場合、もうすでに精霊に・・・というか、世界に気に入られていますからそのうち上級精霊くらい現れるでしょう。ちなみに良いますと上級精霊は数自体少ないのでこの世界ではほとんどいません》

「では、この胸にかかっている奇妙な模様の付いたペンダントは何ですか？」

《そのペンダントは、神様・女神様・世界・精霊・幻獣に認められた証です。言葉の翻訳をしてくれたり、思い浮かべた言葉をこの世界の文字に変換してくれたり、それ以外にも意味がありますのでそれも常に持っていてください》

《この世界は神様が日本のゲームを本に作った世界ですので、馴染み深いものが出てきてもそこは、ご都合主義で、スルーしてください。あなたの創造の能力ですが、あなたのやっていたゲームの道具のみ創造できるようになりましたから》

「ありがとう。後は自分でなんとかするよ」

《では、最後に胸のポケットを確認してください。そのコインは私からのプレゼントです。大切に肌身離さず持っていてください。それを使うことにならないように私は願っています》

《それでは、また何か縁がありましたら、その時は、宜しく願います》

行ってしまったようだ。俺も頑張らないと

いったい、このコインは何なんだろうか、普通のコインにしかみえないんだが

それよりも今は早く人を見つけないければ・・・

人を見つげる前に猪のような魔物に遭遇してしまった・・・

「ブアアアウウウウウン！！！」

え！いきなり突っ込んでくるの！

何か方法は！

そうだ！今の俺には魔法があるじゃないか！

そう思った瞬間、魔法に関係する膨大な量の知識が注ぎ込む

いくつか馴染み深い魔法を見つけた

この世界は本当に日本のゲームを本にしたんだな

そして俺は一つの魔法を頭の中から見つけ出しその魔法を思い浮かべる

一番初めに使う魔法はやっぱり・・・

俺は右手を前に出し、その魔法名を叫ぶ

「彼の者を焼き払え！ファイヤーボール！！！」

直径1mちよつとの火の玉が現れ魔物の元へと飛んでいく

魔物に当たった瞬間、炎はいつきに膨れ上がり魔物を包む

魔物のいた場所は黒くなっており、魔物はいなかった

「は？」

どうやら塵も残さずに跡形も無く消え去ったようだ………俺の魔力はんばねえ 全然疲れないし

火系統の魔法使うのやめよ、危なすぎる。とてもじゃないが使えそうに無い……初級魔法でこの威力とは……

次からは風属性の魔法を使おう、いや、しかし、風属性も危ないよ
うな気が……一通り魔法使って制御できるようにしないと……

というかここから早く離れて人を見つけないとまだ誰ともあつていない

異世界にきた（後書き）

がんばります

運、悪くね？（前書き）

駄文です。戦闘が書けません。

「この作者は何がしたいんだ？」になってきました。微妙です

運、悪くね？

あれ〜全然人に合わないんですけど〜

俺さあ運の向上してもらったよねー

おっかしいなああ〜

あの後、俺は広大な緑の草原の中ずっと歩いていたが景色はほとんど変わらず、途方にくれていた

そして、とうとう陽は落ち、辺りは深い真つ黒な夜になり、静かな草原の中で焦り「なんて静かで、たくさん綺麗な星が見えるんだろ」ださなかった

あー疲れたなー今日はこの辺で野宿しますか

えーと、大きさは縦・横・高さが3mで、雨風を通さず、ある程度の攻撃に耐えることができ、中は適度な温度のテントを創造する。
イメージ
クリエイト
「創造！」

何処からとも無く、一瞬でテントが出現した
とりあえずは成功つと

中は24、5度くらいでちょうど良い温度だった。次は、何かこちらに悪意を持って接近する奴が来たら、すぐに知らせる効果のある目覚まし時計セットを創造、後はふかふかの布団を創造し、気持ちよく深い眠りに付いた

飛竜は飛ぶ事ができずもがいている

今のうちに！もう一発！

「押しつぶせ！グラビトン！」

飛竜の周が黒く覆われていく、そのまま飛竜は包まれて押し潰されていく

骨をえぐる音が続き、音が聞こえなくなると飛竜は押し潰されていった・・・

「この魔法怖ええ・・・」

飛竜を難なく倒してしまった。絶対強いよな飛竜って

「爪とか牙を回収するか」

回収した爪と牙などは腰にあった袋に近づけると袋はそれを次々と飲み込んでいった

「おお！これは便利だ！」

全部入れるとテントに戻り、テントをどうするかと悩み

「空間魔法を使ってみよう！」

魔力を集めて空間を構築していく、程なくして出来上がった

「開け！」目の前に黒い溝が出てきた

中に入ってみると、暗かったので魔法であたりを明るくする

「闇を照らせ！ライト」

そこで見た中の広さは・・・

「すつげええ広い！！、テント作る意味あったかな、と言っかここで寝ればよかった」
いまさらしかたない、次からそうしよう。テントを中にしまい、創った空間を出す

「さあ！今日中に絶対町に着くぞ！」

俺はまた真つすぐと草原を歩いていき、そして坂道になり降りて行ったその先には

村があった

俺、運悪くなってるない？

数キロ先に村があつて、村に入らず野宿って……笑えねえ……

ギルド（前書き）

また説明です。皆さん良く知っている説明です
別に飛ばしてもあまり関係ありません

文才が欲しいです

ギルド

トボトボと歩いて行き、村に到着、門番もいなかったのでも勝手に入る普通の村だった。汚くないが、かと言って綺麗と言うわけでもなく、普通の村だった

ここなんて名前の村なのかよくわからないが、とりあえずギルドを探すことに

畑仕事中の男性に声をかける

「すみません、このギルドって何処にあるんでしょうか？」

「んん？ああ、ここを真つすぐに進むと他より大きい建物があるからそこがギルドだよ」

その人は仕事をしながら答えてくれた

「ありがとうございます。それと、宿屋は何処ですか？」

「ギルドの目の前だよ」

「ありがとうございます、それでは」

言われたとおり進んでいくと、古びた大きな建物があった。なぜ他の建物より汚いのだろうか？

ギルドの前にある宿屋と思われる建物は綺麗に見える。

さて、ギルドに入るとしますか

中に入ると受付の人意外誰もいなかった

あれ、ここギルドだよな、まあいい、気にしたら負けだ

「すみません、ギルドの登録したいのですが」

受付の人らしき茶髪の女の子に声をかける

「はい、登録ですね。この紙に名前を書いて、ここに血を一滴垂らしてください」

俺は指を噛んで血を落とす

「これでいいですか？」

「はい、登録できました。これがギルドカードです。ギルドカードは自分のランクとステータスが確認できます。失くしてしまった場合、金貨1枚と交換となっておりますので注意してください。これさえあれば身分証明書の代わりとなっておりますので、ギルドの説明は必要ですか？」

「はい、お願いします」

「ギルドは知つてのとおり、魔物の討伐を主に扱っており、討伐した魔物の指定された素材を持つてくることによって依頼を達成することができません。」

依頼で達成した魔物の素材はそのまま自分のものに出ることが出来、ギルドに換金することが出来、換金された素材は武器や防具、薬などに扱われ、それらは商人にギルドが売り、商人の手によって違うものになり、冒険者の手にいくという循環が成り立ちます。

他に採取の依頼や商人からの依頼、誰でもどんな依頼でもギルドに出すことが出来ます。

基本的に受けることの依頼のランクは自分のランクに合っていないくても受けることは出来ますが、受けた依頼を達成できなかつたり、期限が過ぎれば成功報酬の10%を違約金として払ってもらふ事になります。

ランクとステータスの説明ですが、ランクは上からSSSS・SS・S・A・B・C・D・E・F・Gとなっており、このランクを上げるには依頼を達成したときにもらえるポイントが溜まればカードを更新した時に自動的に上がっていきます。

ステータスはその人に強さを表した物です。能力は魔物を倒せば上がり、より強い魔物を倒せばその分ステータスの数値が上がります。数値はランク表示で、例えば、Fの次はF+その次はF++でそのつぎがEとなっています、数値はギルドランクと同じ順列です。ですがこちらはいちばん上にEXがあります。

ステータスの中にあるスキルは色々と能力を上げてくれたりなど便利なものと考えてください。

説明はこんなものですかね、後、ステータスは念じれば隠すことが出来ます。

一度ステータスを確認してみればいかかですか？だいたいEくらいはあると思いますが

・・・ちよつと一気に言ったので肺が痛いです・・・」

ご苦労様です・・・

説明はありきたりだったな

早速ステータスを確認してみる

大体のどのくらいか

魔力量

EX++

魔力無限と同じくらい

STR(力)

EX

本気で殴れば城の城壁が崩れます

DEF(防御力)

SSS

巨人の一撃を防ぎます

INT(魔法攻撃力)

EX++

一国をその気になれば滅ぼせます

MGR(魔法耐性)

EX++

全ての魔法無効

AGL (敏捷性) EX + 銃の弾を避けれます
LUC (幸運) A + + 宝くじがよく当たります (1
0枚買って1〜2枚当たる)

スキル

「創造 (制限あり)」 説明省略

「モブ男」 説明・どんなに強くなっても、どんな功績を残しても、
所詮モブ扱い

*これがあると、「威圧」などといった強者スキルが発現しなくな
ります

「賢者」 ・全ての魔法を自由自在に操ることができます

「大精霊の加護」 ・精霊魔法・無詠唱・詠唱破棄の威力が上が
ります

「不幸」 ・ランクが高くても時たま不幸に

「影薄」 ・目立たなくなります

なんてチートな能力……

だが、

スキルに納得がいかない……

それにこのステータス表記はゲームか！

ああ、ここゲームを本に創られた世界だったな……

見方は簡単でいいんだが……

なんで、魔力量だけ英語じゃないの！おかしくね？

それにこのステータスは人に見せるものじゃないな
さっそく隠さなければ

ステータスよ！消えろ！

………おお！消えている

「どうですか？なんて書いてあります？」
適当に言えばいいか

「大体全部Dくらいはありましたね」

「そうですか、改めてこれから精進していつてください」

「はい！早速で悪いんですが素材を換金したいんですが」

「では、あちらに素材を置いてください」

指定された場所に飛竜の素材を出す

あっという間に袋から出していき、指定された場所が半分ほど埋まった

「これ・・・飛竜の素材ですか、どうやって飛竜を倒したんです？」

どうしようか、

「ええと、これは貰ったんです。誰か知らない人が「飛竜倒したんだけど、持てそうに無いから余った奴君に上げるよ」って」

いけるか！

「へーそんな人がいたんですか」

いけた！

「ちょっと待っててください。査定しますんで」

「はい、金貨3枚と銀貨20枚です」

どのくらいの価値なんだろうか

「すみません。銀貨を崩してくれませんか？」

「銀貨5枚を銅貨に換えておきますね」

そうやって俺に金の入った袋を渡してくる。中を確認すると金貨3枚・銀貨15枚・銅貨・・・500枚くらい入っていた。・・・銅貨多！そして、小っさ！

枚数を考えればこのくらいだと思うが、銀貨に比べ小さすぎる。金貨は銀貨より一回り小さいくらいだ

「すごい収入ですね！」

どのくらいの価値があるのか分からないため喜べない・・・

「そうですね、今日はもう宿屋に行きますね」

「はい、これからがんばってください」

俺はギルドを出て目の前にある宿屋に向かう。やっぱりギルドだけ

どこか少し汚いと俺は思う
宿屋一泊いくらするんだろか

「すみません、今日泊まりたいんですが」

中年のムキムキでヒゲモジヤのおっちゃんが出てくる

「飯なしでただ泊まるだけなら銅貨10枚だ。夕食が欲しけりゃ銅貨20枚だ」

「はあ、飯ありでお願いします」

「部屋は2階の一番奥だ」

無愛想なおっさんだな

「部屋はそれなりに綺麗だな」

んゝ明日からどうしようか？身分証明書手に入れたし、もう次の町に行こうか、どうしようかなゝ

魔物倒して金稼ぐのもいいけど、面倒だなゝ

もういつその事、商人になろうかなゝ俺、創造して物作れるからな仕入れ値0だし楽できそうだな（笑）

コンコンガチャ

「飯だ、ほら」

無造作に床に置かれる

「食い終わったら廊下にも出しておいでくれ」
そう言つと部屋から出て行った

「なんだあのおっちゃん」

飯まずかったら文句言つてやる！

パンとシチューが置いてあり、俺はシチューを口に運ぶ

「……どこの店のシチューより普通にうまい」

何か悔しい

「ご馳走様でした」

トレイを廊下に出す。そして俺は何か疲れたからベットへとダイブ！

とてもふかふかだった

なので、

少し早いが寝る事にする

ややこしい事は明日また考えよう

お休み

ギルド（後書き）

ステータスの数値考えるのメンドかったからランク設定にした

HPが無い理由・いちいちダメージ計算だるい

MPではなく魔法量なわけ・ただなんとなく。MPでランク表記は
変だと思ったから

この後どうするべきか・・・

このまま魔物討伐する？それともチートな能力使って一儲けする？

うつ眼いぜ(前書き)

結構飛ばします

うっ眠いぜ

「うっ眠いぜ」

さて、今日からどのような過ごし方をしようか

ギルドで運搬系の仕事探して別の町に行こうかな、たぶん無くても行くけど

それよりも銅貨の価値が知りたい。元の世界にあったような食べ物探して価値を知らなくては、この先困る

ということ、やっぱり、次の町行って市場に行くことにしよう。町ならば市場くらいあるだろ

一階に降りる、ヒゲモジャがいた

「俺もう行きますね。飯うまかったです」

「おう」

「それじゃあ」

ヒゲモジャはやはり無愛想な奴だった。店を出て、目の前のギルドに向かう。何度見てもここだけ違和感ありまくりだ。中に入るとやはり誰もいなかった。寂しい所だな

ギルドの掲示板へと向かう

「えっと、運搬系運搬系」と

ない、だと！

いやその前に！

依頼の数が10も無いなんて、どれだけ交流がないんだよ！この村！

〈掲示板〉

依頼1 とある冒険者

報酬 銀貨10枚

誰かギルドの前にある宿屋のヒゲモジャ野郎を殺してくれないか？
あいつ滅茶苦茶無愛想で鬱陶しいんだよ！しかも俺にだけ法外的な
値段出してくるんだぜ！

理由が「お前汚ねえから」だぜ！ふざけてんじゃねえぞ！だから、
俺は奴を帰り際に殺そうとしたら反対に返り討ちにあった。だから
誰か奴をヒゲモジャを殺してくれ！

・・・ヒゲモジャ何言ってるんだよ、てか、こんなの置いておくなよ。
・・・

依頼2 近所のおじいさん

報酬 わしの武勇伝

誰かわしの武勇伝を聞いてはくれんかの？最近みんな冷たくてな寂
しいんじゃ・・・

孫も村のみんなも「遂にポケ始めちゃったのか」って哀れな目で

ワシを見てくるんじゃない！
だから、わしの相手をしてくれ〜！かまって〜

・・・頑張れおじいちゃん

依頼③ 畑をこよなく愛するもの

報酬 家で育てた野菜

誰か、家の畑仕事を手伝ってくれないか？最近腰が痛くてな、雑草を抜くのか、無視を払うのか結構辛くなってきたな、誰か心優しいものが受けてくれないかな。

畑をこよなく愛している私が君を待っている！！！！

もう、まともな依頼は無いのか・・・
思い描いていたのとはあまりにも違いすぎる・・・

だが！しかし！俺はあきらめない！次の町にはきつとまともな依頼があるはずだ！

俺はあきらめないぜ！認めないぜ！

俺はギルドを抜け出て門番さんを無視して（なぜかいた）道走り出す！！！！

走り出して気付いた事

走った道が魔物の大群にでも襲われたかのように荒れ果てていた

あ！

……終わってしまったことは気にしない！

なぜか道がボロボロになったかはさて置き
おれは仕方なく歩いていった

黒い狼型の魔物が3匹現れた！
「グルルルウウ」
黒い狼はやる気満々だ！

めんどくさい！あれをやってみるか！……ふふふふ

俺はゲームにあつた物を創造する

「創造！手榴弾！」

これこそが科学の力だ！

俺は取っ手に付いたピンを抜き相手に投げつける！

そして、あたり一面に鼓膜が破れるような凄まじい爆音が鳴り響く
！！！！

投げつけた地面だけが黒く染まり、そこには魔物だった肉片だけが
残る

けほけほけほ、むせた

さすがは科学の力、でも使わないようにしよう後が面倒だ

それと、出てきてすぐに何かゴメン

程なくし、俺は街に着く。途中あれ以外何も無かつたのですぐに着
く事ができた。なかなか立派な門だ。

町が結構でかそうだ。俺は町に入るために門番さんに声をかけに行く

「すみません、町に入りたいんですけど」

門番さんがこちらを睨んで

「なにか身分を証明できるものはあるか？」

俺はポケットからギルドカードを取り出し渡す

「これでいいですか？」

門番さんはカードを確認し

「ああ、通ってもいいぞ」

「ありがとうございます」
「通れたぜ！」

「ようこそ、ガルムの町へ」

俺は門をくぐりぬけ町を目にする

「結構華やかなところだな」

見た目、何処かのヨーロッパの風景が見える。それに人がたくさんいた

「まずは、市場にいくか」

適当に歩いてたらその内見つかるだろ

そのまま通りを歩いて行きすぐに市場を見つけた。ずらりと並ぶ商品に、たくさんの人だかりがあり、商人達はみんな商品を買ってもらうように一押し物宣伝していた。こういうところには着たことが無かったので気後れしてしまった。

さてさて、商品をしっかりと見て把握しないと、

俺は林檎一つ手に取り

「すみません、これください」

「はいよ林檎ね、銅貨一枚ね」

「はい銅貨一枚」

林檎一個、銅貨1枚らしい。と言う事は、ギルドで両替してもらったときの事を考えて、銅貨一枚だいたい百円くらいで銅貨100枚で銀貨1枚だから銀貨1枚・1万円くらいか、金貨は1枚・100万円か！俺の今の手持ちは金貨3・銀貨15・銅貨499枚なので日本円に換算すると、約320万円も持っているのか！すごい大金だな！

よし、どんどん商品見ていくぜ！
なぜなら、俺には創造があるからな！見て確認さえすればどんなものでも作り出せるからな！
もうイヤッホーてな感じだぜ！

後は道具屋つてあるのかな魔法関係の店でもいいけど、まあ、人に聞けば分かるか

通りを歩いてきた人に尋ねる

「すみません、この辺に道具屋つてありますか？」

歩いてきた男性は

「ああ、それならその角を曲がって裏路地に入って、真っすぐ行けばわかるよ」

「ありがとうございます」

そういえばこつちに着てから「ありがとう」「すみません」を滅茶苦茶使ってるな

裏路地といえ、珍しいものが置いてあるに違いない！！早速行かなければ！

教えてもらった道を歩いて行き、目的の店を見つける。すごく綺麗な店だった。こういう所って普通汚くて古い建物があるんじゃない

かな？そして怪しそうなフード被ったお婆さんが出てくるんじゃないのかな？

だが、現実はその様な事も無く

「いらつしやいませ」

若い男の人が現れる

店の商品はいろいろなものがあつた。俺の目に留まつたものは、【HPポーション】【MPポーション】
なんで、HPも無いのにHPポーション？それにMPポーションも、しかも一番安い【HPポーション（小）】で銀貨3枚、何でこんなに高いの？

「この【HPポーション】と【MPポーション】ていうのは、どういう効果なんですか？」

「【HPポーション】はですね、体の傷を治してくれるんですよ、こうあつという間にね、治癒を使える人は少ないから便利なんですよ【MPポーション】は体の中の魔力の回復を早める薬ですね」

いや分かつてはいたが、いやはや何と言いましようか

「何で、こんなに高いんですか？」

これは気になる

「作れる人が限られているのと、作れても効果があまり無かつたり、手間隙がかかりますからね、【ハイポーション】までいくと金貨が必要になったり、【エリクサー】になると何十枚も金貨が必要になるくらいです」

あ、俺一応【エリクサー】創造できます

「でも、【ポーション】系はほとんどの店で取り扱ってますよ、どうします？買って行きますか？」

「いえ、遠慮しておきます」

殆んど見たしもう行くか、いや、良いこと聞きました、ひと商売できそうだ

さて、もう夕方だし宿屋に行って寝ますか

うう眠いぜ(後書き)

ネタを・・・私に・・・く・・・だ・・・さい

初依頼

「ああ、眠い、まだ寝ていたいギルドに行かないと」

この町には、ふざけた依頼は無いと俺は信じている……！
ということぞ！

ギルドにGO――！

そしてまたしても俺は人に尋ねる！

「すみません、ギルドは何処でしょうか？」

赤い髪の女の人は

「ギルドなら市場の近くにあるわよ、ああ、市場が何処にあるか分かる？」

ギルドが市場の近くにあったと！俺は気付かなかったんだが

「市場の近くにあるんですね、市場の場所なら分かります。ご親切にどうもありがとうございます」

本当に親切な人が多いです

「それじゃあね」

女の方は軽く手を振って歩いていった

市場の近くを探す。だが一向に見つからず、諦めてまた人に聞こう

かなと思ったときに、ようやくギルドを見つけた。場所は市場の近くと言えば近くなのだが、としか言いよの無い場所だった

ようやく見つけたギルドに入ると

「おい！ガキがこんなところに入ってくるんじゃないやねえ！」とお約束の言葉を言われる事も無く、すんなりとギルドの入った。中には人相の悪そうな奴とか、昼間から酒とか飲んでるやつがいた。何で言われなかったんだらうかと思っていると、頭の中に何か響いてくる

スキル「影薄」が発動中です。影が薄くなります。このスキルは、相手がこちらを認知しない限り発動し続けます。*相手がこちらを知っていると効果が低くなります。声を出すと認知されやすくなります。

気付かれていなかっただけなのか、

いや、虚しいね、何なんだろうね、これは得したはずんだけどね、
複雑な気持ちでいっぱいだ

もう気にしないで行く事にした。気にしても何も変わらないから
ギルドの掲示板の前まで行く

さあさあさあ！やって参りました！ギルドの掲示板！まともな依頼があるように祈る

〈ギルド掲示板〉

ランクE

依頼人・ギルド

討伐・ブラックウルフ 10体 推定ランクE 参考 集団だとラ
ンクD++

報酬・銀貨10枚

期限・4日

場所この町の近くの森辺り

ブラックウルフは黒い狼だ。奴らは集団で襲ってくるから注意して
くれ！一匹一匹はそれほど強くはないが集団でこられると厄介だ！
魔法使いがないパーティーは用心しろ！

証明素材・黒狼の毛皮

たしか、この町に来る途中いたような・・・手榴弾で吹っ飛ばした
よな、

ランクD

依頼人・ギルド

討伐・ボブゴブリン 3体 推定ランクE++ 参考 ゴブリン

ランク E

報酬・銀貨18枚

期限・7日

場所・町外れの洞窟付近

ボブゴブリンはゴブリンの中にいるリーダーだ。だから必然的にボブゴブリンの討伐はゴブリンの集団と戦うことになる。ゴブリンは人間の子供位の大きさを緑色をしている。ボブゴブリンはゴブリンより一回り大きくて、茶色なのが特徴

証明部分・耳

お決まりのゴブリンだな(笑)

ランクB

依頼人・ギルド

討伐・オーク D ハイ・オーク C オーク・ロード Bをそれ

ぞれ一体

報酬・金貨1枚

期限・10日

場所・街道付近・森・山脈

オークは一言で言うとなつて豚みたいな奴で、槍を持っている。今回気をつけて欲しい敵はオーク・ロードだ

そいつはハイ・オークの上位種でかなりの強さを誇っている。体がかいので接近戦は注意してくれ

証明部分・オークの右手の手首

ほお、なかなか強いようだが、俺には魔法があるからな

ここにはふざけた依頼はなかったな、ん？他にもいろいろあったけどオーク討伐受けようかな。報酬も良かったし、不意打ちすれば何とかなるだろう

よっしゃー！ー！！それじゃあ受けに行くぜ！！！！

俺は掲示板の紙を剥がして受付のところまで持っていく、受付の人は女の人で、歳は20歳くらいで茶髪で髪が長く、10人中8人は美人と答えるくらいの人だ

「この依頼を受けます」

え、この人が？と言う顔をされる・・・悲しい・・・仕方ないと思うが、悲しい

特に、美人の人にそういう風な顔をされるとすごくヘコム・・・依頼を一回も受けたことの無いGランクだけどさあ・・・

「えっとこの依頼をあなたが受けるんですか？」

「ええ、そうですけど」

何を言ってるんだ？

「本当に大丈夫ですか？」

「ええ、」

「本当に？」

「ええ、何度も言ってるじゃないですか」

そんなに頼りないか？

「・・・では、ギルドカードをこちらの水晶にあててください。・・・はい、これでこの依頼はあなたが受注しました。期限は10日となっていますのでこれを超えると違約金が発生します。気をつけてください」

そう言われてギルドカードを返される。あの水晶どうなってるんだろ？

「はい、わかりました」

「では、頑張ってください」

笑顔で言われる。業務スマイルだが、俺には関係ない！すごく癒された！

さあ、即行で終わらせるぜ！

S i d e 受付の美人さん

今日もいつものように仕事をしていたら見かけたことの無い人が来ました。その人は掲示板まで来てなにやら考え事をした後に依頼の紙をもって来ました。ここまでは普通の光景だったんですが、

持って来た依頼が問題だったんです！

持ってきた依頼はオーク討伐の依頼でしたが内容の中にハイ・オークとオーク・オードが入ってたんです！！

ハイ・オークはまあ、頑張ればいけるかなあ？って思ったんですが、あの装備で、あのどこにでもいそうな顔で！・・・すみません、言い過ぎました。

ですが、オーク・ロードは無理でしょう！だってどこからどう見ても！もう一度言いますが、どこにでもあるような服装とただの変哲も無い剣だったんですよ！しかも！極めつけはその人ランクGだったんですよ！ランクG！あんなの無理に決まってるのに・・・
ああ・・・かわいそうに、いるんですよね、たまにあんな人が、自分の力量を分かってなくて報酬に目がくらんだ人が、少しでも怪我がないように祈っておきましょうか

S i d e . o u t

初依頼（後書き）

次回、戦闘なのに戦闘短いです。なぜなら、即行で終わらすから！
・・・不意打ちで・・・

オーク討伐（前書き）

ぐだぐだの駄文です

オーク討伐

俺はさっそく森へと向かう。この手の敵は森に行けば必ず遭遇すると決まっているからだ！

俺は道が壊れない程度の速さで森へと走る
* 人間の粋を超えています

程なくして町からそう遠くない森へ、森の前に看板が置いてあった。書いてあった事は

この森の名前は「魔物の森」です

うん、そのままだね、

絶対にこの森には魔物がいます

そりゃ、「魔物の森」だし

遊び半分で中に入ると後悔します

別にオモシロガツテナイヨ

森のランクは少々高めのランクBです。とても危険です。自信の無い方はすぐに立ち去ってください

たぶん、大丈夫と思うよ！俺チートっすから！

読んでいて町の近くにこんな森があつていいのか？と思ったが、一番下には魔物が近くに来れない様にする為の結界が張られていると書かれていた。なんとも親切な看板なんだ。どれだけ読んでいる人の心が分かるんだ。書いた人は詐欺師か何かか？と思つてしまつたのは仕方ないだろう。

俺は、看板のなんとも親切な長つたらしい文章を全部読み、ありがたと思ひながらもそれを軽く無視しながら森に入つていった。森の中は暗くて薄気味悪くなくて、結構見通しがよかつた。なんだ！ここは危険地帯なんだろ！なんでこんなにも見通しがいいんだよ！草木がボウボウと生えていないんだよ！隠れられないじゃないか！……はあ、まあ、しかたない。さつさと見つけて倒して帰ろう

しばらく森を歩いてオークを見つけようとしたが見つかからない

なぜだ！

こんなときに不幸にならなくてもいいじゃないか！

シンドイ、メンドクサイ、ダルイ……あ、

魔法を使えばいいじゃないか！

何で思いつかなかつたのかなあ？使えば一発で相手の場所が分かるじゃないか、なんでわざわざ探していたのだろう？多分まだ元の世界の感覚が残つていて魔法と言う非科学的なことは思いつかなかつ

たんだろっ。

俺はオークを探すため魔法を使う。え〜と、こういうときの魔法は
く……そうそう

「探索」

……東のほうに一体オークがいた。近くにハイ・オークもいる。
俺は駆け足でそこに向かう

いた！身長が2メートル位の茶色くてまるまると太った豚みたいな
奴が一体だけそこにいた。俺は茂みの中からオークの様子を伺う。
オークは何処かに向かって歩いているようだ。何処に向かっている
のか良く分からないがこれはチャンスだ！

俺はオークの後ろに回りこみ、剣をそーっと構える。

なんで魔法じゃなくて剣なんだって？俺が魔法を使うと過剰攻撃に
しか成らないからな！本当は俺だって魔法を使いたいよ！剣を使っ
て戦うのって怖いんだよ！もう腰が抜けそうなんだもん！

ええい！ママよ！俺は覚悟を決めた！俺は殺るぜ！！！！

俺は草むらから行きよいよく飛び出しそのままオークの背中に向か
って走る。あつという間にオークの背中まで行き、剣を振りかぶり、
右斜め上段から左斜め下段へと剣を振り切る！

「GYAAAA!!!!!!」

オークは血を噴出して叫び声をあげ、前のめりに倒れていった

「ズドンッ！」

・・・やった！やったぞ！それにしてもすごい剣だな、スパツと綺麗に切れたぞ！

俺は手早く倒れたオークから証明部分の右手の手首を剥ぎ取る。

うええ、気持ち悪い・・・これ以上見たら吐きそうだ・・・

俺は剥ぎ取った手首を腰の袋に詰め込む。持っていた槍も回収しておこう、槍は空間を開いて入れておく。

俺は体に付いた血が我慢できなくて、魔法で作った水と創造して作った石鹸を組み合わせ、器用に水を操り洗っていく。最後にもう一度水を魔法で作り洗い流す。剣と服も洗っておく。

次は、ハイ・オークだな。手っ取り早くハイ・オークを倒しに行こう。

「探索」

すぐ近くにいたハイ・オークはまったく移動していなかった。・・・寝てるのかな？それなら簡単でいいんだけど

俺は探索で調べたハイ・オークの場所まで移動する。いた！、ハイ・オークは木陰で眠っていた。ハイ・オークの体の色は濃いピンク色だ。・・・気色悪い

またしてもチャンス！

あ、でももう汚れたくないな、魔法使いたいけど何の魔法なら過剰攻撃しなくてすむだろうか？

ん〜槍でぶつさせばいいんじゃないかね

と言う事で、魔法で水槍を作ります。これだけでは不安なので、そこから水の水槍を凍らせて・・・はい水槍のできあがり！！！！はい！パチパチパチ〜さらに！そこから水槍に絶対に当たると言う概念を付けて・・・

出来た水槍をハイ・オーク目掛けて投げる！！！！

投げた水槍は太ったお腹の上の心臓目掛けて飛んで行き、そのまま水槍が心臓に刺さる！！！！

ハイ・オークは叫び声もあげずに即死した

ふう、何とか汚れずに倒せたぜ！・・・剥ぎ取りどうしよう？

仕方ないので、剣に魔力を纏わせて右手首を切る。剣に魔力を纏わせえた事によって剣は直接汚れることは無くなったのだ！ナイス！俺！

切断した右手首を風を使って、そおっと、手を使わずに腰の袋の中にしまう。・・・完璧だ！

次はオーク・ロードだな、オーク・ロードなら初級魔法くらい耐えられるだろう・・・たぶん！

また探索魔法を使いオーク・ロードを探す。ここから南に行った所にいる。結構遠いな・・・

空を飛んでみるか！この世界の魔法の中に飛翔魔法があつたのだ！やはり一度は魔法で空を飛んでみたいだろう！誰でも一度は憧れただろ！この機会にそれをやってのけるのだ！

魔方阵を構築・展開！俺は今から空を飛ぶんだ！！！！！！

「飛翔！！！！」

イッケエエエエエ！！！！！！

結果から言いますと俺には無理です。高すぎます。すいません。もう、ジェットコースターに乗っているときの感覚が永遠と襲うんです。あまりに高すぎて、吐きそうになりましたし、目が回りましたし、何よりも足が地面に着いていないともう怖すぎて怖すぎて・・・

もしかしたら何かがあつて魔法が解けて、空から落ちたりしたら即死じゃないですか！！！！すみません、自分はチートスペックなので死なないと思います。でも！本当に怖かったんだーーーーー！！！！！！もう絶対に空は飛ばない！

それから、徒歩で目的の場所まで来ました。

目の前にはオーク・オードがいます。今現在先ほどの飛翔魔法のせいで結構八つ当たりしたい気分です。思ったんですが、右手首さえ無事ならば、それでいいと思っんです。もうメンドクサイです。即行で終わらせませす。一瞬で

「魔方陣構築、術式展開、目標オーク・ロード」
空中にいくつも魔方陣が現れる。魔方陣はすべてが違う大きさで違う色をしていた

「発動」
瞬間、空中に浮いていた魔方陣から多種多彩な槍が放たれる

「GGGAAAAA」
オーク・ロードは叫びますが、次々と無限のように放たれる槍の前では、例えBランクだとしてもその力は無力に等しかった

しばらく経ち俺は

「あゝ殺り過ぎたく明らかに過剰攻撃だわ」

目の前には無残にも穴だらけになり、かろうじて原型を止めている肉片があった。

「どうしようか、遂、奴当たりしてしまった」

大丈夫だ俺！奴の右手首は無事だ！いやいやいや！そういう問題じゃないだろ俺！・・・過ぎてしまった事は仕方ない！俺はオーク・ロードの右手首を腰の袋に入れる。血とかも気にしない、もう面倒だ。・・・風呂に入りたい、お風呂を作ろう。

俺は空間を開いて中に入る。俺は創造を使って5m四方の建物で中は銭湯のような感じになるように創造する。

「創造！」

よし！目の前にはなぜか、お湯が出たり、なぜか、風呂に張った水が永遠と綺麗なままで勝手に浄化され、なぜか、流れた水が何処かに排出される。これでもか！と言う完全に世の中の常識を超えたものが出来上がった。この世界は魔法があるからいいんだよ！細かい事は魔法で解決できる世界だからいいんですよ！

「俺は風呂に入る！」

カポーン・・・こんなに広いのに一人だけしかいないのは虚しい・・・

風呂に入った俺は空間の中に仕舞ってあったテントの中に入り、ふかふかの布団（ここ重要！）に寝転がる

「あゝ眠い、もう今日は精神的に疲れた」

そう言って俺は目を瞑り、夢の世界へと旅立った

オーク討伐（後書き）

書いてみるとシンドイです。小説を書くのって難しいです。でも出来るだけ頑張ってみます

帰還

ポカポカする、まだ眠い・・・眠いけど起きなくては・・・

起きた俺は、空間から飛び出し、創造でサンドイッチを出す。創造
便利すぎ！

食ったサンドイッチはなかなか美味かった。満足満足！

俺は森を抜けて町に帰るために探索の魔法を使い、この地域一体を
くまなく把握する。

「町はここから西か、・・・遠いな・・・」

森の奥までできていたので、その分、帰るのはやはり面倒だ。

そう、面倒なのだ。

もう俺の頭の中では面倒＝魔法使えばいいんじゃない？になっている。
というか、何かあったら魔法を使えばいいと思っている。だから、
俺はもうあらゆる場面で魔法を使いまくり楽しんでやる！

こんな場面で便利な魔法と云えば、【転移魔法】これしかないだろ
う！

【転移魔法】は、一度いったことのある場所を頭の中に思い浮かべ
て発動させる。この時、思い浮かべた場所の名前を言うと、転移し
た時あまり位置がずれなくなる。この魔法は消費魔力が多く、転移

する場所が遠ければ遠いほどその分、さらに、消費魔力が必要になる。

と頭の中で出てくるが、俺には無限に近い魔力があるから、そんなの関係ない！

【転移魔法】を発動させるのは初めてなので、全ての工程をきちん
とやることにする。失敗した時怖いからな、体の一部だけ取り残さ
れてしまつとか

俺は足元に魔方陣を構築する。ええと、町の名前は、たしかガルド
の町だつたけ？

「術式展開！目標！ガルドの町の近く、【転移魔法】発動！」

足元の魔方陣が淡く光だし、徐々に光は強くなり、俺を包み込んだ。

到着

転移して着いた場所は、俺にとって忌まわしき坂の上だ。坂の上に
立つとその忌まわしさが、しみじみと感じてくる。東を見れば広大
な草原が広がっており、また、西を見れば近くに町がある。この坂

さえなければ俺はあんな目に遭わなかったのに・・・消してしまおうか、この坂。・・・さすがに消してしまつたら非常にまずいので諦める。・・・やっぱり災害に見せかけて消そうかな。それほどの坂が忌まわしいのだよ！

ずっとそのまま悩んでいての仕方ないので町に向かう。さつさとギルドに行つて早く依頼を終わらせたい、なぜなら美味しい物を食べたいから！まだこの世界に来て珍しい食べ物を食べないのだから！異世界に来たのだから普段と違うものを食べてみたい！

坂から走つて街の門まで行き、ギルドカードを提示して町の中に入る。そのままギルドに向かう。なぜかあつた、人だかりを次々に避けて行きやつとのことでギルドに到着。そのまま中に入り受付まで行く、受付の人は依頼を受けた時と同じ茶髪で長髪の美人さんだ。その美人さんと目が合う。

？なんだろう、やっぱりですか？って顔をされたような気がする

「すみません、昨日受けた依頼なんですけど」

「はい、依頼に取り消しですね、では違約金の10%を払ってください」

「いや、そうじゃなくて」

「え、まさか違約金を払えないんですか？その場合、一定期間無償で働いてもらう事になりますか・・・」

「え！、いや！そうじゃなく」

「それではまず……」

話を聞いてもらえない！なんでさ！俺は「受けた依頼の証明部分持ってきたんですけど、どうしたらいいですか？」って聞こうとしたのにどうして依頼の取り消しの話になっているんだ！何か勝手に話が進んでいるし！早く誤解を解かなくては！

「あの！そうじゃなくてですね！話を聞いてください！！！」

「それじゃあですね、ここにサインをしてって、ん？、何か分からない所でも？」

「まず、依頼の取り消しではありません」

「じゃあ何ですか？」

本当に分かっているのか？

「俺は依頼の証明部分を持ってきたんですけど、どうしたらいいのかわからなかったたので、あなたにどうすればいいのかわかろうとしたんです。決して依頼の取り消しではありません」

「昨日の依頼以外にか受けていたんですか？」

「いえ、昨日の依頼の証明部分ですけど」

言った瞬間、彼女の顔が凍りつく……一体なぜ？

「じゃ、じゃあ、その証明部分をこの箱の中に出してください」

俺は言われたとおり箱の中にオークの右手首を入れる。彼女がオークの右手首をじっと見て

「・・・・・・・・・・・・・・・・本物ですね」

「そりゃ偽者なんかじゃないですよ」

偽者なんか持ってきて何の意味があるんですか？というか、偽者を用意するほうが面倒でしょうが

「ギルドカードをこの水晶にあててください。・・・もついいですよ。はい、これが報酬の金貨一枚です。ランクも変わっているはずですから確認してください」

金貨一枚が手渡される。そして、ギルドカードを見るとランクがDになっていた。やったぜ！

「あの〜どうやってオーク・ロードを倒したんですか？」

やっぱり聞かれるよな〜どうみても俺が倒したように見えないからなーちょっと八つ当たりして倒しましたなんて言えないし

「不意打ちで倒したんですよ、こう、後ろから背中を切り裂いたんですよ」

「はあ〜まあいいです。素材の方も換金しますから出してください」

「へ？」

「え？」

「素材の換金って何のですか？」

「そりゃ、オークの皮ですけど……って、もしかして剥いでない？」

「……あ、いけね、剥いでなかったや、えへへ／＼／＼」

「あははは……」

「……信じられないです」

そのジト目はきついです。そして、なぜか彼女が凄く目で見て分かるほど不機嫌になっていき……

「あなたは何をやってるんですか！命の危険を冒してまで倒したんでしょ！素材を剥いで換金するのは当たり前でしょうが！」

剥ぐのを忘れました！命の危険ってほどではありません！そんな常識言われても困ります！ああでも、金が手に入らなかったことは痛いんです！

「えっと、それは、その、急用を思い出したので失礼します！！！」

「あ！、ちよつと！」

俺は「待ってください！」と呼び止められたがそんなものお構い無

しに一目散に逃げる！そんなお説教聴いてたまるか！俺は美味しい物を食べるんだ！

ギルドを出て、しばらくしてから走るのをやめる。ギルドに行くまでの道にあった人だかりが消えていた。人だかりのあった場所の中心には看板が立っており

「ええと、何々、今週の王都のおいしい料理は終了しました。また来週ご期待ください。・・・なんだと！

ここで王都のおいしい料理が食べれたのか！あの人だかりはそういう意味だったのか！畜生！食べたかったなあ・・・そういえばこつて王国だったんだな」

はあ、一週間待たなければならぬのか、いやもう王都に行くか、どうしようか？

S i d e 受付の美人さん

ああ、来ました来ました。昨日依頼を受けた人です。どうやら賢明な判断ができたようです。早速違約金の手続きをしてつと、え？、払えませんか？それじゃあ、この書類に・・・もう！なんなんですか？

依頼の取り消しじゃない？証明部分を持ってきた？つて、この人何か違う依頼受けてましたっけ？ん？昨日の依頼ですか、いやでもま

さか・・・証明部分を出してもらい私のスキル「鑑定」で調べてみます

・・・あれ、本物！こんな人がオーク・ロードを倒したんですか！
どうやって倒したんでしょうか？

・・・不意打ちで倒せるような魔物じゃないはずなんですけどね、
まあいいです。ついでに素材の換金の方もしておきましょう。

え、素材を剥いでないですって・・・あなたは何をやっているんですか！基本ですよ！基本！こんな誰でも知っているはずなのに！
・・・あ！ちよつと！いきなり帰らないで下さい！・・・ああもう！

Gランクで、初心者丸出しで、どこにでもいそうな・・・平凡そうな顔で、どこにでもありそうな武器と服装でたった一日で目立った怪我也無く、オークとハイ・オークとオーク・ロードを倒して町まで戻ってきた。と、ギルドマスターに報告しなければなりませんね。
・・・それにしても見かけによらず異常ですね。

Side・out

お呼び出し

おお、神よ、なぜ彼女は私の眠りを妨げるのですか？

俺は現在進行形で必死に布団に身を包んで・・・もがいている。

「起きてください！起きてください！朝ですよ！ギルドマスターが今すぐに呼んで来いって煩いですから早く起きてください！」

朝から美人さんに起こされるのは男の夢と言うが、実際にこんな状況になってみて思うことがある。もうこんなシュツエーションは御免だ。さっきから「起きてください！起きてください」と受付の美人さんが、ひたすら俺の背中を叩いてくる。いや、殴ってくる。いつの間にか手がグーになってたのだ。地味に痛い。

「起きろー！起きろー！起きなさい！」

こっちは朝早くから起こされて眠くって眠くって仕方ないと言うのに・・・はあ、これがギルドマスターからの呼び出しとかでなく、受付の美人さんが朝から俺を訪ねてきたとかいう理由だったならば眠気を我慢して喜んで起きていたのに・・・

「ギルドマスターが呼んでいるんですって！早く来てもらわないと困るんです！」

ギルドマスターからの呼び出しとかメンドクセーやる気でねーこっちは眠いんだよ！しかし、いい加減同じとこ殴られていると、いくらチートといっても腰が痛い、なぜか殴る力が信じられないくらい強い。腰痛とか絶対に嫌だ。こっ腰が、うう、仕方ない起きるか！

「わかった！わかりました！起きるよ！だから殴るのは止めてくれ！」

「私は別に殴っていませんし、殴っていたとしても初めから素直に起きていればよかったです。それに私は、わざわざ、あなたの泊まっている部屋を探し出して、ちよつと部屋の鍵を拝借しただけですし」

「いや！殴つてたし！それに不法侵入じゃねえか！何で素直に起きなければならぬんだ！こっちは被害者だ！」

「なつ！こつちこそ本当の被害者です！あなたがハイ・オークを倒してしまったのが悪いんです！Gランクで、しかもたった一日での依頼をこなしてしまったあなたが悪いんです！」

別にいいじゃないか！依頼は早く終わらせる方がいいだろ！何が悪いんだ！

「そもそも！何で受付のあなたがここに来ているんだ！」

「それがですね、あなたの事を良く覚えている人が不思議な事に私以外にいなかったんですよ。みんな、なんとなくは覚えているんですけど、どうしてでしょうか？」

それは俺の影が薄いからだ・・・それ以上言わないでくれ、ちよつと傷ついているんだ・・・

「そつえば、あなたの名前は何て言うんですか？」

「俺の名前は綾川葵だ。あやかわあおいいや、アオイ・アヤカワになるのかな？まあ、気軽にアオイと呼んでくれ。それで、あんたの名前は？」

そつえば、俺も名乗らなかつたし、彼女の名前もまだ聞いてなかつたな

「アオイさんですか、私の名前はアリア・フィエルドです。アリアと呼んでください」

「アリアか、それじゃあアリア、さつさとギルドマスターのところに行きますか」

「はい！よろしく願いします！アオイさん！」

俺はアリアと一緒にギルドに行った。途中から周りからの視線が痛かった・・・なぜこつという時だけスキルの効果があまり効かないんだ！

「アオイさん、こつちです。付いて来て下さい」

俺はアリアの後ろに付いて行き、一番奥の部屋に入る。

「ギルドマスター！例の人を連れてきましたよー！」

部屋の中は広がったが、ソファと棚と机しかなく、寂しい部屋だった。ギルドマスターは優しそうな顔をしながら何とも言えない貫

禄を出していたが、身長が低くハゲていたので、その、違和感ありまくりだった。

「おお！あなたが例のアリアが騒いでおったGランクの者か！ん、聞いてはおつたが・・・普通じゃな」

普通で悪うございました！

「わしの名前はバナード・ロダンという。ここのギルドマスターをやっている。お主の名前は？」

「俺の名前はアオイ・アヤカワです。それで俺に何の用があるんですか？」

「お主が本当にハイ・オークを倒したんじゃない」

「ええ、俺が依頼を受けて倒しました」

「すまんがの、ちょっと、ステータスを確認させてくれんかの？」

ん、やっぱりか、どうするべきだろう？素直に見せておいた方がいいか、・・・たぶん、この爺さんなら大丈夫だろう。信用できそうだし。俺はポケットの中からギルドカードを取り出し爺さんに渡す。

「ほっほ、たいしたステータスじゃ」

爺さんはそう言って俺にギルドカードを返してくる。そんなに問題になるほど高い能力値じゃなかったのかな、そんなことないと思うんだけどな、

「それでの、お前さんに折り入って、お願いがあるんじゃないが引き受けてはくれんかの？ちなみに断ればギルドマスターの権限でギルドカード取り上げるからの」

お願いじゃねー！！横暴だ！責任者出せ！・・・あ、この爺さんが責任者だ。ギルドマスターめんどくせー何を押し付けられるのやら

「実は、サイモンという冒険者をコテンパンにして欲しいんじゃない。かなりの実力を持っているAランクの冒険者なのじゃが、自分の力に酔っていて困っておるんじゃない。残念な事に、そいつをどうにかしようにも、そいつがいなくなるとギルドの損失がかなり出てしまうので何も出来んままでの。どうか、そいつの根性を叩きなおして欲しいんじゃない。・・・それに女癖が悪くてアリアにまで手を出そうとしておるんじゃない。本当に困った男でのお」

うっわ、メンドクセーの来たー！！！！！！

いるよな〜自分の力に酔っている奴。ああ〜めんど〜だってさあ〜
そういう奴に限って、なかなか諦めが悪いんだよな〜

「やり方は簡単じゃ、わしがアリアが景品ということを決闘の場を作るから、そこでサイモンを叩きのめしてくれ。それなら相手も乗ってくるじゃろう」

「はあ〜」

アリアさんを景品にね〜

「ちょっと！ギルドマスター！何言ってるんですか！私を巻き込まないで下さい！それに、さすがに無理ですよ！Aランクの冒険者が

相手じゃあ勝てつこないですよ！何でアオイさんに頼むんですか！

「大丈夫じゃ、心配はいらん。それに、そこまで焦る必要も無いじやろう。」

「全然大丈夫なんかじゃないですよ！なんで私がサイモンとアオイさんが決闘するときの景品になってるんですか！」

「仕方ないじやろう。サイモンをおびき寄せるために必要な事じゃ。何を言おうともギルドマスターの命令じゃ」

「横暴です！人権は無視ですか！人の気持ちを何だと思ってるんですか！」

「人の気持ちのおゝそういえば散々あの冒険者がゝあの冒険者がゝと、騒いでおったアリアはアオイのことが気になっておるのか？んゝ？」

「なっ！／＼違います！そんなんじゃないやありません！確かに気にはなっていますけど、まだそういうものではありません！」

「ん？まだ、じゃって？若いのゝ若いのゝ」

「もうっ！だから！・・・もういいです！失礼しました！！！」

「・・・あれゝ何かアリアさんの反応が・・・なんで？どうなってるの？ついていけないんですけど、ちょっと、爺さん何でドア閉めるの？」

「さて、アリアはもうこの部屋にはいないからの、これで改めて話

「出来るわい」

「……え、まだ何かあるんですか……さつきと雰囲気が違う気があゝもうさつきと帰りたいんですけどー」

「おぬしは一体何者じゃ？なぜあれほどのステータスを持っているのじゃ？」

爺さんは真剣な目つきで俺に聞いてくる。

「なぜ……と言われましても……」

神様の事とか、チート能力とか説明できないでしょう。それに絶対に信じてくれなさそうだし、俺だったら信じないと思うし。

「ふむ、話してはくれんか……そのステータスは危険極まりないものじゃ。例を上げるのならば一流の冒険者達の平均ステータスがランクA相当でギルド内トップレベルの平均ステータスはS～SSランク程度じゃ。皆が認めるうちの国の王国騎士団長は確か魔法耐性がEXで他がSランク以上だったかの。もうこれ以上強い者は世界で10人いるかどうかのレベルになってくるんじゃ。どうじゃ？お主のステータスの異常さがわかったかの？」

チートだとは分かっていたが、そこまでチートだったのか……

「だからのお主にはきちんとその力のあり方を分かっただけで欲しいんじゃ。お主がその力を悪用してしまったら一国が滅びてしまうかもしれんほどじゃからの」

爺さんは本当に俺のことを心配そうな目をして言った。

「ん〜一国が減びるとか想像も出来ないし、そんな事はしないよ。俺は絶対にこの力をそんな事に使ったりなんかしない。」

この俺がそんなことに使うとでも？

「そうか、それならいいんじゃないが。では明日の昼ごろにここにまた来てくれ、その時には決闘の準備が整っているはずじゃからの」

明日の昼ごろか・・・起きてるかな？

「わかった。明日の昼ごろだな」

俺はそう言っただけ爺さんの横を通り抜け、鍵が掛かっているドアを開けてギルドを出た。

「さて、今日は何を食べようかな？」

俺の頭の中は食べ物でいっぱいになった。

S i d e ギルドマスター
爺さん

むむむ・・・こやつステータスはおかしい！何なんじゃ一番低い L U C（幸運）の値で A++じゃと！世の中をなめておるのか！ステータスは魔術師傾向の癖に S T R（力）が E X とか次元が違いすぎる！羨ましい！わしなんて現役時代が一番高かった S T R の値は S S じゃったというのに・・・羨ましい！羨ましすぎる！どうやってこんなステータスを手に入れたのやら・・・平凡な顔をしておる

のに・・・ああ！羨ましい！あのステータスがもしも現役時代のワシにあったのならモテモテのウツハウツハじやったのに！

ゴホンツ！・・・あゝあまりにも妬まし過ぎて心の叫び声がゝまあ、わしが一番心配しておる事は利用されそうで怖い事じゃな。見た目は普通としか言いようのない奴じゃったからのお。そういえば、アリアはアオイのステータスの事は知っておらんかったの？黙っていたほうがいいじやろう。

明日の決闘はサイモンがコテンパンにやられることが決まったしのう。まずアオイが負けるはずがないからの。ああ！あの傲慢なサイモンの唾然とした顔が早く見たいのう。

なんせ、表向きには何処からどう見ても何処にでも居る普通の冒険者に負けるのじゃから

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9913w/>

神様から来た招待状

2011年10月28日07時15分発行